

東日本大震災の被災地石巻
社会福祉協会職員の方（その1）

<チームジャパン300の心理カウンセラーの活動をどのようにご覧になっていますか？>

はい。そうですね。震災直後ということもあったんですけども、うちの職場の職員家族兄弟親、亡くされた人も多かったものですから、それでも仕事をしなくちゃならない、という風な環境のなかで、やっぱりみんな毎日泣いてばかりいるんですね。

そこで浮世先生をご紹介いただいて先生のメンタルヘルスケアをご講義受けたことによって、やっぱり先生の表現である「スポンジを絞る」という風な、それをやってもらったことが、今のうちの職場、あるいは石巻のやっぱり活動のやっぱり源になっているっていうか。やっぱり全然それが出会いがなければ、やっぱり我々まだまだこう、スポンジいっぱいの水を含んだままで、日々生活を余儀なくされていたのかな、と。

先生のご講義を拝聴したあとは、みんななんかこうスッキリしたっていうかですね、それが顔の表現の変化もありまして、ほんとに先生に出会えたことは、一番私を始め、先生に出会えた人たちは、とても良かったなと思ってます。

地域でも、何件か講演してもらったんですけども、やっぱり、とかく被災している人と、被災していない人っていう風に分けがちになるんですけども、やっぱり石巻市民であれば、全員が浸水した、全壊したは別として、全員がやっぱり被災者であるということに改めて気づかされたっていうか。

やっぱり被災地支援になってしまうんですけども、やっぱり在宅で生活している人たち、仮設が建っている場所というのはやっぱり浸水していないエリアに建つわけですよ。そうするとやっぱりグラウンドがなくなって子供達がサッカーができなくなったりとか、野球場が、まあ、仮設ができちゃって、やっぱりそういう風なことで、やっぱり全員が被災者っていうような部分だと思うんですね。

だからやっぱり石巻市民は、いろんなボランティア団体さんが入ってきてもらっているんですけども、やっぱり、全員が、まだまだ1年経ってもやっぱり風化しないように、あの、それだけを願っているっていうかですね、うん。やっぱりあっという間っていうか、されど、その、人によってはまだまだ3月11日のままで止まっている人もいますし、個々みんな、スピードが違うんですよ。

そしてまあ、チームジャパンさんのそのマッサージっていう風な関わりを通してやっぱり、最初はその、被災者の疲れとかそういう風な形かなー、と思っていたところ、やっぱり心までこうほぐしてもらえるっていうか、そのやっぱり関わりができてよかったかな、と。

なによりも、継続してもらっているのが一番ですよ。うん。ほんとに、私は石巻しか知りませんが、やっぱりこの石巻のために来てもらっていただいているっていう風

な団体は、一番、ありがたいなと。ええ。できればこれからもご支援いただければな、と
思ってます。

< 社会福祉協議会の職員としては大変苦勞されているとお察しします。 >

やっぱり石巻は、仮設住宅の住民がみんな地域がバラバラなもので、やっぱりコミュニ
ティが破壊された上で新しいコミュニティ形成を作るのに、みんなどうしたらいいの
かな、こうしたらいいのかな、顔の知らない隣近所のわからない中で日々日常を築き上げて
いくというのは、私でも考えてもとてもとても想像できないぐらいの大変さって言うか、
言葉にも表すことができないぐらいのものがあるんだなって。

で、うちは個人的ですけども、被災して家が流されて、でも納屋が残ったんですよ。納屋
を改造して母が住んでいるんですけども、でもやっぱりこの仮設の人達はやっぱり住む
家もない。あなたの家は納屋が残っただけいいっちゃと言われた時に、あの、あー、そう
なんだと。

やっぱり全て流された人の思いとか、今まで元気に朝「いってきます」って言って別れた
人が、急に居なくなるつらさ。うん。やっぱりそれがはかり知れないというか、未だに私
もそうなんですけども。

だからその、気持ちをくみ上げることができないっていうかですね。やっぱり、かける
言葉が無いっていうかですね。

あの、みんな頑張れよ頑張れよっていうけど、みんな頑張ってるし。

でも、頑張るなよっていうと食べていけないしね。

そのへん、言葉が、はじめてあの、広辞苑開いても載ってないような。言葉を見つけられ
ないというのは初めてですよ。私も被災者ですけども、やっぱり職業柄いろんな人に出会
うときになんて声をかけていいかわからないしね。

でも浮世先生は寄り添って、傾聴して、頷いてっていう風なところでいいんですよって、
いう風にお話ししてくださいましたんで。やっぱりその辺の導きもあって、なんとかかん
とか日々を過ごさせてもらっているかなと思っております。

< いろんな地域の方が集まる仮設住宅ではコミュニティの問題もあるとお聞きします。 >

やっぱり隣近所知っているのか？って聞くと知らないっていうか。やっぱりそういう風な
のが、当たりまえ。どの仮設でもあると思うんですよ。

みんな孤独死の方とかいろんな部分で、いろんな活動、支援入ってもらってますけども、
やっぱり本当にこの一年たっても隣の人の顔が分からないとかですね、やっぱり子どもの
声がうるさいとかですね。まあ壁が薄いのもありますんで。

やっぱりその集会、仮設の中で過ごすっていうつらさっていうかね。

冬は寒いしねえ、夏は暑いし、風呂は追い炊きも無いし、いろいろ改善点は今後されていきますけどね。

まずはやっぱり家がなくなっただけのつらさが癒えないことと、その新しい場にきても住人のみんなと仲良くやっていけるのかな、やっぱり十人十色ですから、色んな、いい人もいれば悪い人もいれば、合う合わないありますよね。そんな中で、こう、生活するっていうのは、ほんとに心痛めるような場合もありますよね。

そんな中でやっぱりチームジャパンさんの月1回を待ちわびて、あの、楽しみに、やっぱり、その、集会所で出会える喜びっていうかね。1ヶ月ぶりだけでも、まず、どうしてた？とかね。うん、ひとこと声をかけてもらったのがやっぱり嬉しいっていう。

やっぱりそれは、チームジャパンさんのそういう、月1回の訪問があって成り立つようなものであって、毎月これがあれば、ある意味安否確認じゃないですけども、月1回チームジャパンさんがくれば、みんな、出て来ない人も出てくるような。うん、本当に、重要な役割を担っているのかなと。私は思いますね。

東日本大震災の被災地石巻 社会福祉協会職員の方（その2）

<復興の道のりもまだ半ばで決まっていなかったことも多いと聞きますが。>

この広い日本の宮城県の石巻のねえ、やっぱり自分の家がなんでこうなったんだろうっていう、誰しもが思うこの現状なんですけどね。

でもやっぱり日々日々ね、うん、環境が、瓦礫だらけだったのが、だんだんだんだん、ひとつの柱が減っていったりとかね、家が綺麗にとか、片付けが始まってね、街の復興に、土台作りが段々できてきたかなと。

ただ今の石巻の方でも、現地にとどまるか、高台へ移転するのっていうような、やっぱり、これからのことに、やっぱり比重が動いてるんですね。うん。やっぱり命をどう守るかかっていう風な部分では高台なんだろうけれども、やっぱり住み慣れた家に、また家を建てたいっていうか。

建てるお金も無い人もいるのかもしれないけども、やっぱり、そのコミュニティに戻りたいっていう。ふるさとに、津波で持って行かれたかもしれないけども、やっぱりその長年住み慣れた街、あるいは、嫁いできた、自分が歴史を刻んだ地域っていうんですかね。やっぱり、そこらへんはやっぱり、譲れないものがあるのかなと。

命とは確かに大事なんだろうけれども、やっぱりそれ以上のものは無いと思うんですけども、やっぱりそれと同等のものがやっぱり、自分達の刻んできた道しるべっていうか、歴史っていうか。

その場に、やっぱり泣いたり笑ったり怒ったりね、うん、そこに家族が居てね、遠くから嫁に来て、仕事見送って、ようやくこれから自分の生活をエンジョイしようかなっていった矢先にね、命を奪われたり、家を失ったりとかしたなかで、もう一回この仮設に住みながらも、次の将来を見据えた時に、やっぱりそれでも、そこに戻りたい。でも、危ないから高台に避難しましょうね、移転しましょうね、ってどっちもどっちってような。でも、私はその、頑なに、その、自分のエリアに戻りたいっていう人の気持ちも、分からないわけではないっていうか。じゃあ命はどうするんだって。いいんだ、命持ってか来たって。そのへんやっぱり、想いというのは、その人でなければわかんないのかなって。

やっぱり猟師さんは、特に石巻は沿岸部ですから、沿岸部の中であの、津波にみんなもっていかれたけども、やっぱり海に恩恵を受けていままでやってきたし、やっぱり恵みの海だと。つらい思いをさせられたけども、またこういうふうによれば、また海はちゃんとこういう風な、生育したりですね、そういう部分が海にはちゃんとあるんだという。高台移転すると、やっぱりその、船の道具とか、海にもっていくのはひどいし、みんなやっぱり、漁師は海辺の街に、自分の今の場所に戻りたいっていうのがやっぱり多いんですよ。多分漁師でそこを離れたっていう人は誰もいないと思うんですよ。こんな目にあっても。そこはやっぱり海の男っていうんですかね。うん。

やっぱりその、自分の存在っていうか、やっぱり漁師に限らず、そのこの生活の場っていうのは、やっぱりその人の生き様の場だったんですよ、きっとね。だからやっぱり、その、場にこだわるっていうか、場に何もこだわる必要はねえっちゃっていう、まあある意味言われるかもしれないけれども、やっぱりそこに、その人の想いがあるんでしょね。やっぱりこの石巻は古い町ですから、あの、先祖代々、おじいさん、その先祖、で、もっと上から代々こう伝わって、家を守ってきたっていうかね。昔の家父長制度っていうかね、3世代同居家族が多いんですけども、やっぱりその中でも今回やっぱりそういう被災した人の中では自分の代ではやっぱり、とかっていう風な、思いが強い人もいっぱいいるんですよ。

<震災後に特に苦労されたのはどのような点ですか？>

私もこの仕事をして初めて、その、どうしたら、あの一、被災したみんなっていうか、自分そのものの存在を、どう思っていけばいいのかっていうような、普段、常々考えますよね。

やっぱり、毎日毎日食べるものも無かった状況のなかで、今があるんですけども。やっぱりその、食べられなかった、こんな豊富な時代、物が何もなくなったっていう、ありえない話しが現実があって。そこをくぐり抜けて来た時に、やっぱり全ての存在そのものが、考えざるを得ないっていうか。生きるとは何なのか、とかね。

紙コップも被災当日は、一個に名前書いて使った。6日ぐらい使うわけですよね。割り箸も。でも普段は使い捨てなんですよね。やっぱりそれがやっぱり、あの、不思議でしたよね。使い捨てのものは、大事にしなきゃっていうね。当たり前だったものが当たり前でない状況が、初めて。

そして、ライフライン。電気、ガス、水道もなくなりました。この中で、何が一番はやく復旧すれば良かったのかなって思ったときに、私は電気なんですよね。ガスは火をおこせば、なんとかありますから。水道は自衛隊が運んできますんで。

でもこの電気はね。オール電化の家は何の役にもたちませんからね。

どんなに秒速の光がね、ありがたかったっていうね。やっぱりその、照らすっていう風な想い。いまその電気そのものが色んな電化製品はありますけども、停電になった時に、まあ、感じることもかもしれませんが、何ヶ月か、真っ暗闇のなかでね、ひとが生きているってというのは、怖いっていうか。暗闇の中で生活するってというのは、怖いですね。

<今回チームジャパン300の心理カウンセラーが企画した仮設住宅のイベントはどうでしたか？>

やはり、すごい元気を届けてくれたなと思います。

この仮設、こんなに笑顔だった、住民っていうかね、仮設で暮らしてきて見た事なかったですからね。

みんな沈みがちでね、笑ってるとか、身体を動かすとかってというのは、多分、震災前のことかなっていうくらい。

やっぱりこの人もこういうふうな笑顔になるんだなっていうこととかね。

やっぱり、今日っていう日ってというのは、参加されたひとには大きなね、力になって、また今日からの生きていく糧になっていくのかなって。絶対、なるはずだと思いますね。うん。

初めて出会って、そういう風な経験は無かったんですけども、やっぱり先生は別格っていうか。そういうとやっぱり、石巻職員っていうか、先生に出会ったって人は、救われたって人は、多いもんですから。

間違いなく。うん。本当に、あの多いもんですよ。出会えなかったらば、駄目になった人達っていうか、まあ、悪く言えば病気になったっていうかね、そういうふうな人も絶対いたと思いますね。

みんな待ってるんです。ええ。本当に、みんな待ってますよ。